

巻頭言

豊かな風景, 豊かな空間の生成による幸せな時間を, すべての人が過ごすことができる社会を実現すること

佐々木 葉



景観への取り組みの進展と苦悩

この長いタイトルは、研究室のウェブサイトをたちあげたときに綴った、研究室の活動の究極の目的を表すフレーズです。10周年、15周年などの節目に何度か振り返りましたが、その都度このままで良いと了解しています。むしろますますこの目的が大切になっているように感じます。美しい風景や快適な空間というよりも豊かな、安全安心というよりも幸せな。何をもちょう豊か、幸せというか、それ自体をじっくり考えることの重要性です。

土木の世界で景観をテーマにした研究や仕事に携わって30年以上が経ちます。その間に周辺に調和させた構造物や地域の歴史や文化を継承した施設や空間をつくらうという意識と努力は格段に広がりました。厳しいコストの制約のなかでの取り組みや工夫は、本来の機能に即した統合的な形でよい景観を各地で作っています。機能と景観やデザインがトレードオフの関係にあるという思い込みはまだ根強く残っているものの、専門家から市民まで、望ましい景観や環境の形は、何か特殊で特別なものではなく身近にあるものだという理解が広がっています。

その一方で「ベージュ景観」と呼ばれたりする、色などを無難な感じに揃え、ルールをまもることが景観への配慮として目的化してしまったかのような例もあります。マニュアルや指針によって一律に答えを示せない、これは景観に限ったことではありませんが、その都度その場ごとに考え、合意して答えを出していくことが、現代ではなかなか難しくなっているようにも思います。スピードと効率性と平等、さらに説明責任が求められた時、規準通りに進めたいのは当然です。よってきめ細かなガイドラインやAIへの期待が高まります。しかしある条件下での適切な答えを探しているその横で、条件そのものが想定を超えて変化しています。気象、加速する高齢化と人口減少、そして感染症。手元の右左ではなく、眼差しを少し遠くに向けて目指す方向を確かめなければなりません。

景観のお手本としての自然

建物が並ぶ通りや大規模な橋やダムといった構造物では、人工物の造形が景観の印象を左右します。とはいえその立地や配列は大地の相貌と無縁ではなく、水辺や緑地、敷地造成など建設機械が活躍する場所は自然の一部です。地球を造形し、大地をデザインする、その仕事は自然に立ち向かったり、自然に馴染ませたり、自然を作り出したりします。あるいはコロナ禍で多くの人が目を留めて一時の安らぎを得たまちなかの小さな緑であっても、それが存続する環境をつくるには建設機械の仕事がどこかにあるでしょう。都市であれ山野であれ、大地の上に何かを作るときには、自然を尊重し、自然が持っている構造や特性を知ったうえでの造形の決定が必要になります。

その一方で、景観やデザインの議論の中で語られる自然は、ときにとっても矮小化されています。木を使う、石を使う、樹を植える、芝をはる、水を流す。学生がすぐ思いつくデザインアイデアです。それら人工物ではない素材はどこからきて、どこへいくのか。時間の流れのなかでどうあり続けるのか。自然という言葉を使わずに議論するのは容易ではありません。天然の存在。人の介入がない環境状態。人が維持している土と水と植物と生き物のバランス状態。重力と水と太陽エネルギーが引き起こす外力。私たちが向き合う環境の形を簡単に自然と人工に分けることはできません。なかなかいい日本語がないのですが、それはほぼ全て built environment 建設環境なのです。

その建設環境として自ずと然りな状態を大スケールでも小スケールでもその都度見つけていくことが、豊かな風景と空間に繋がり、そこでのくらしと棲息に無理を強くない、そしてふとしたときに幸せだなと感謝したくなる人生と時間をもたらすのではないのでしょうか。精度高く働く建設機械の向こうに、地球まで広がる世界を想像しながら。